



私は、諦めない自分でありたい

人権・同和教育課 三好 章子

7月、熊本地方を震源とする地震が発生した。熊本は平成28年にも大地震に襲われている。テレビで被災地の様子を見ると西日本豪雨のことを思い出す。当時、前任校で3年生の担任をしていた私は、同じ学年団の教員とクラスの有志の生徒と、災害後、かなり早い時期に、野村町での災害ボランティア活動に参加した。その後、参加した生徒たちが、全校でボランティアに行こうという提案をし、「そうだそうだ!」という流れで準備が進んでいく中、ストップをかけてくれた人がいた。教師になりたての若い先生で、彼女は、平成28年熊本地震の時、熊本で生活していたそうだ。彼女は、自分の経験をもとに、災害ボランティアが、「良いことをした」という達成感をもたらすがゆえに、素晴らしい社会貢献をしたという特権意識を生むことの危険性を教えてくれた。また、教師が参加した生徒を賞賛することで、参加しない生徒との間に溝を生み、体調や家庭事情により「行けない」生徒への想像力を欠く可能性があることを示してくれた。若い教師が、「良いことをみんなでしょう」という流れに対して、意見を言うことは勇気が必要だったのだろうと、今になって思う。ただ、彼女の勇気がなければ、私たちはボランティアの本質を忘れ、「みんなで」という同調圧力による「差別」を生むところであった。私は、あの時の彼女の勇気に、今も感謝の気持ちを持ち続けている。

その後も話し合いを重ね、希望者で野村町での災害ボランティアに参加したのだが、ボランティアの心構えの中に「被災者の気持ちに寄り添った言動を心掛けましょう」というものがあり、当時の私は、この「寄り添う」という言葉に違和感を覚えた。私はボランティアを終えたら、クーラーの効いた家の中で疲れを癒す。明日に不安を感じることはない。家を失い、暑さ厳しい避難所で生活する被災者の気持ちを理解し、寄り添うことはどうしたって無理なことではないか、と。この「当事者の気持ちを理解することはできない」という私の考えは、今思えば、人権・同和教育HR活動にも影響を及ぼしていた。中途半端な「理解」で当事者を傷付けるのが怖く、「こんな差別がありますよ」と、差別紹介のHR活動をしていたのだと思う。そして、このこと自体が差別であったのだと、後になって知ることになる。

6年前、大洲高校で私に与えられた仕事は、HR担任ではなく、大洲・喜多地区人権・同和教育推進主任だった。この6年は「担当エリア全体の人権教育の推進・指導・調整」という、課せられた仕事のワケの分からなさで茫然としながら研修を重ねる中で、自分の無知と無神経を思い知らされる日々だった。ただ、一つだけ自分の成長と受け止めることができるとすれば、推進主任をして多くの人と出会い、言葉を交わす中で、「他者の気持ちを理解するのは無理」という考えが変わったことだ。人権・同和教育とは、差別をなくしていくための教育であるが、その活動や学びの中で、「自分がどういう人でありたいか」を考える、自分のための教育だと、今の私は考えている。

私は、部落差別を受けている人の気持ちを、完全に理解することはできない。

例えば、ハンセン病回復者の故郷に帰れない苦しみを、障がいを持つ人の生きづらさを、ガザ地区の子どもたちの不安を想像することしかできない。

他者の気持ちを理解しようと頑張っても、理解できる保証はない。それでも—。

多分、今の私は、「それでも—」の先を諦めない自分でありたいのだと思う。なぜなら、ある研修の中で出会った、「差別の刃の前に一人で立たすな」という言葉が私の胸に響いたからだ。差別を受けている人の気持ちに寄り添うことは難しい、差別をなくすことは難しい、それでも、大洲の生徒を、共に働く教職員を「差別の刃の前に一人で立たせない」自分でありたい、と思っている。

